

第 45 回 スイス史研究会

ゾーロトゥルンの宗教改革とその挫折
野々瀬 浩司

日時：2003年 4月10日(土) 14時～18時10分

場所：日本女子大学「百年館」3階 301会議室

まず序論において、ベルント・メラー著『帝国都市と宗教改革』の内容を紹介し、都市共同体と宗教改革運動に関する問題提起を行った。そして自治都市であるゾーロトゥルンの場合は、そのような一般的な定説に反して、さらには宗教改革と農民戦争との関係や新しい思想の受容経路という側面においても、非常に特殊な事例であることから、この都市の民衆運動に関する実証研究の必要性を強調した。次に第一章では、十六世紀までにどのようにゾーロトゥルン市が政治的に発展していったのかについて概略的に説明した上で、政治体制、経済状態、外交関係、農村支配、宗教政策、文化的状況などの宗教改革の背景に関して論じた。そして、第二章から第四章でゾーロトゥルンでの改革運動の進展と最終的な崩壊について、時間軸に従って詳述した。第二章ではベルン宗教討論(1528年)までの初期の宗教改革の経過に関して簡単に言及し、第三章では第二次カペル戦争期(1531年)までの間に改革運動が展開し、ベルンから説教師としてハラールを迎えるなどの絶頂期に達した史実に触れた。最後に第四章で、その後改革運動が衰退へと向かい、苦境に陥ったプロテスタントが1533年に蜂起して鎮圧された経緯について報告した。

以上の考察に基づいて、次のような仮説を提示した。第一に宗教改革を支持した社会層に関しては、ゾーロトゥルンでは農民、船乗りツunft、改革派のエリートなどの多様な人々が混在し、不均質な層によって構成されていた。取り分け急進派と穏健派との間の意志疎通が不十分であったために、改革派全体の方向性の統一や組織化ができずに、船乗りツunftの人々が武装蜂起へと暴発した。総体的には改革派は被支配階層に支持を受けたが、彼らの全てに共感を得られたわけではなく、しかも支配層までは十分には浸透しなかった。なお市民権を持たない最下層の住民の活動が、不鮮明である。さらにゾーロトゥルンは再洗礼派に対して例外的に寛容な政策を採用したために、彼らの活動が根強く残存し、そのことが宗教改革の展開にとってマイナスに作用し、統一的な改革運動の組織化を妨げた。第二に都市共同体と宗教改革との関係については、四つのツunftのみで改革派が多数を占めた。しかも、それらのツunft内でも9割を越すような多数の共感を得られず、運動は分裂的であった。結局宗教改革の共同体原理は、ゾーロトゥルンでは世俗の共同体原理とは完全には融合しなかった。部分的に「信仰条例」の中で個人の信仰の自由が容認され、宗教改革の導入の必要性を個々の共同体が余り感じなかったのではないだろうか。民主的なツunft支配体制は不十分ながらも、ある程度は制度化されていたが、都市門閥や拡大市参事会の政治的影響力が強く、彼らの多くは積極的には宗教改革を支持しなかった。議員の選出権は都市上層が掌握し、役員改選の際にカトリックが有利な状況を創出し

た。完全な民主制ではなかったために、改革派は両派併存体制を維持することもできなかった。農村においては、市内以上に宗教改革の神学と共同体原理が結び付いたが、結局農民の意向よりも、ゾーロトゥルン市民の意志が市政に強く反映した。第三にゾーロトゥルンでは、外交的要因が重要な役割を持った。特にこの地域の宗教改革運動を活発化させたのは、ベルンの宗教討論と第一次カペル戦争という外的な出来事であった。場合によっては、ゾーロトゥルンにとって宗教改革の導入は、ベルンへの政治的従属をもたらしかねない重大な危険性をはらんでいた。逆に第二次カペル戦争での改革派の軍事的敗北の影響によって、ゾーロトゥルンではカトリックの立場が強化され、改革派の活動を弱めた。フランスとの外交関係も、微妙な影響を及ぼした。傭兵を否定したツヴィングリの神学は、フランスからの年金収入に依存していた上層階級にとっては、容認できない思想であった。第四に、改革派の聖職者と政治家の中には卓越したリーダーが不在であったのに対して、カトリック側には優れた政治的指導者が輩出し、役職の改選などの巧みな政略によってプロテスタントを翻弄した。特に重要であったのは、宗教討論の延期に二回にわたって成功したことであった。第五に教会財産の国有化や市当局による聖職者への管理・統制が、中世末からある程度進展し、教会諸制度が衰退していたため、公権力にとって宗教改革に伴う経済的利点が乏しかった。しかも、全ての「信仰条例」には聖職者の不正や倫理的墮落を糾弾する内容が多く含まれていたことから、市参事会の中には教会勢力に対する民衆の不満をある程度は取り入れようとする姿勢が認められ、カトリック教会内での改革が部分的に成功したと推定される。それによって恐らく聖職者の幾つかの諸特権や不正が除去されたため、民衆から激しい反教権主義は形成されなかった。第六に他の都市の事例とは異なり、農村から都市へと宗教改革の思想が流入し、農村では改革派が多数を占めた。ゾーロトゥルンのような地方の中都市の場合には、思想や文化的側面において、外部からの影響を受け易く、周辺農村に対して十全に中心地的機能を果たすことができなかった。ゾーロトゥルンは、学問・芸術・文化・教育に側面において特別に停滞していた町ではなかったが、市内には出版業は未発達のままであったため、社会批判の精神的雰囲気は醸成されず、チューリヒやバーゼルのように、独自の新しい思想や文化を創造するような拠点とはならなかった。

私見によれば、メラーの理論は、中心地機能の高い大都市の場合により適合的であって、ゾーロトゥルンのように外部からの政治・社会・経済・文化的な影響が受けやすい中都市のケースには、共同体的原理以外の複合的な要素が絡み合ってしまったのではないだろうか。